

～～ 靖国神社「遊就館」を観て ～～

I. S

私鉄「連帯する会」の全国総会が九段会館で開催された機会に、閉会Mさんと2人で、すぐ近くの靖国神社と「遊就館」を見物してきました。

安倍自公政権の中樞を「靖国」派が占めているといわれています。「靖国」派のルーツとは何かを見極めたいと思ったのが動機です。入館すると映像ホールへと導かれます、ここで上映される50分間のドキュメント映画「私たちは忘れない」は、日本の侵略戦争を「国家と民族の生存をかけ、一億国民が悲壮な決意で戦った、自存自衛の戦争であった」と美化し「戦場に赴いた将兵に、侵略や虐殺などの意思があっただろうか」「アジアの国々は、あの戦争によって植民地から解放され独立した」などのフレーズが続く。亡くなられた将兵を「神」として祭る神社だから、正しい戦争と描くことになるのでしょうか。あの戦争をすすめたことを反省する言葉は最後まで聞かれませんでした。国内における権力による、言論弾圧や人権蹂躪など非人間的な行為は問題にもされていません。

安倍首相のいう「美しい国」とは、戦場へ赴く夫を、笑顔で送り出す妻の姿を「美しい家族愛」「夫婦愛」と描くのか。いずれにしても安倍首相の目指す「美しい」は戦前・戦中の人間関係に焦点が当てられているように思われます。「戦後レジームからの脱却」と言うのも天皇を中心とした「国柄」つまり戦前の「国体」の「再建」と言うことになるのではありませんか。コロンビア大学のジェラルド・カーティス教授は「民主主義国のリーダーが自分の国のレジーム・チェンジ(体制変革)を求める意味は理解しにくい」「安倍首相の捨てたがっている戦後レジームの何がそんなにひどいのか、ぜひ説明してほしい」と述べているそうです。

以下ストーリーの一部を紹介します。◆「日本参戦を仕掛けた米国の陰謀、そして日本は隠忍自重しながらついに苦渋の開戦決断へ」◆「日本を侵略国と断罪した東京裁判の不当性を暴き刑場の露と消えた『戦犯』の無念をふりかえる」◆「戦局悪化の中、祖国日本の防衛のために玉砕、特攻と尊い命を捧げた若き将兵たちの思いに迫る」この映画を企画・制作したのが日本会議・英霊にこたえる会です。「英霊にこたえる会」は靖国神社への総理、閣僚などの公式参拝の定着を求める国民運動を進めている団体です。

展示室には、靖国神社の歴史から皇室とのかかわり、日清・日露戦争、満州事変、支那事変、大東亜戦争、靖国の神々(戦没将兵の遺影)、零式艦上戦闘機、人間魚雷「回天」などが展示され、まさに戦争博物館です。

教育基本法の改悪、憲法改悪の策動・国民投票法案の強行採決などの反動的動向が、戦前への回帰を見るようで、肌寒さを感じずる見物となりました。